

女性医師はなぜ辞めるのか

東京医科大学病理診断学講座

泉 美貴

まさか女性医師の大部分が医師を辞めてしまふとは、一般の方々には思いもよらないことだろう。しかし医学の世界では、当然のこととされている。医学部に入学し、六年間も医学教育を授かり、国家試験に合格した優秀な女性たちが、職を辞しているのである。

昨今、「医療崩壊」とか「医師不足」が巷でかまびすしいが、それも女性医師の高い離職が一因となっている可能性がある。一人の医師を育てるのに五〇〇万円とも六〇〇万円ともいわれる税金が投入されているのに辞めるとはなんたることか、というお叱りもあるかもしれない。医師が大量に辞めるという現象は、世界中で筆者の知る限り日本だけの特異な現象である。

本稿では、どうして日本の女性だけがキャリアを継続できないのか、その責任はどこにあるのかについて考察する。

女性医師の離職の実態

(1) 女性医師の離職

結果から述べると、女性医師の七割以上は一生のうち、少なくとも一度は離職している。しかも医師になって五年以内、一〇年以内という比較的早期に離職してしまうのである(筆者が行った平成一八―二〇年度科研究費調査「基盤(C)」による)。この傾向は最近の女性医師に限ったことではなく、この何十年間も変わっていない。離職時の勤務先は多くが大病院であり、大学が人を育てる場所ではなく、「離職の場」となっている現実がある。

(2) 女性医師と妊娠・出産および育児

離職の理由は妊娠や出産が最多で、次いで育

児との両立である。もし本当に、妊娠・出産および育児が医師のキャリア継続の障害となっているのであれば、女性として生まれ落ちた時点で、すでに医師としての道はないということになる。男性と女性の決定的な違いは、女性だけが妊娠・出産および授乳を担うことである。妊娠・出産は、死亡することさえありうる大業である。この大きな負担を、それをしなくてもよい周囲の人間でカバーしなければ、子どもをもつことに前向きな女性は誰もいなくなるだろう。これは本邦の抱える少子化問題の根本にあるといえる。

残念なことに、女性医師に結婚後の女性の職業意識を尋ねると、圧倒的多数(離職した女性医師でさえ)が、「結婚して子どもをもつても職業を続けるべきだ」と回答しているのである。続けたいという自分の意志に反して医師を

辞めていくとはどういうことか、その実態をみてみよう。

妊娠中の女性は、体調が不良となることが多いため、周囲の同僚の誤解を招きやすい。妊娠した女性医師が急に早退や休憩をとると、やる気がないとか能力がないとかと映りかねない。日本の医学界には、妊娠中の母体を積極的に保護する規則や慣例はない。したがって、日々の仕事をこなすことができなければ、それは「医局のお荷物」であり、即クビにつながってしまうのである。妊娠によって離職した女性医師は、異口同音に「医局に迷惑をかけるのがこころ苦しい」と言って辞めていく。人生で最も喜ばしいはずの妊娠を、「迷惑な」事象と考えさせられ、職まで奪わせしめる医学界の風潮は、一般社会との乖離が著しいのではないだろうか。

女性医師の妊娠・出産における合併症の頻度は、通常人のそれよりも高いことが数多く報告されている。本来妊娠中は、健康な子どもが生まれてくることだけを自身も周囲も優先すべきである。妊婦と一言でくくっても、筆者のようにつわりもほとんどなく、産前四週まで無事に働き続けることができる者から、日常生活も大変なほどの重症者もいる。つらければ休めばよいのだが、現在の医学界では、それが許されていない。

一方、妊娠した女性医師側は、体調の不調を

周囲に明確に伝える必要がある。とくに各料を一〜三カ月ずつローテーションしている研修医では、周囲に人柄や医者としての能力を理解されていないだけに、余計に体調不良が誤解を招きやすい。妊娠した女性医師は、妊娠による仕事の減速の程度をどの程度に設定するか、産休や育児休暇の期間を早めに決断して、周囲に頼む必要がある。頼まれた側は、その人の望みに従うのがよいだろう。こうしたいと願われたにもかかわらず、「いや、もう少し外来を担当してもらわなければ困る」というような医局の都合を押し通すことはナンセンスである。妊娠、出産、授乳は長い人生からみれば、たかだか一年半の出来事である。周囲がこの期間を協力しさえすれば、女性医師の離職は大幅に防げるのである。これができるかといえれば、人間社会の正常な営みや精神とはいえない。

(3) 女性医師に何を望むのか

おもしろいことに、医師と結婚した女性医師と、医師以外と結婚した者とは、離職率に差がある。男性医師と結婚した女性医師のほうが離職しやすいのである。理想とする医師になることを希求し精進することに、男女で差があるはずはないだろうが、男性は自分は社会的に成功したいが伴侶には自宅で子どもの世話と家事に専念してほしいというのだろうか?

同僚医師は、女性医師に何を求めているのであろうか。仕事上で親しいある男性教授が、秘書さんたちの持参する弁当を見て、「泉先生も弁当を作らなくちゃだめじゃないか」と笑う。彼には、毎日弁当作りに時間を割いていては、自分の患者にベストの病理診断など私が提供できるはずもないことが理解できないのだろうか? 女性医師には、男性医師と同等に医師として高い能力が求められるべきである。そのためには厳しい修練も当然必要である。「女性はすぐ泣くから指導が難しい」という男性医師は、それを口実に指導を放棄してはいないだろうか。指導者は、女性医師にも平等に機会を与え、昇進をさせなければならない。

(4) 復職

いったん辞めたとしても、医師免許は一生の資格なのだから、子育てが一段落したらまた現場に復帰すればよい、と誰しも考えるであろう。しかし現実には一度離職した女性医師は、ほとんど復職しない。女性医師の離職は、医学部を卒業後、きわめて早期に生じているため、即戦力としてすぐに現場に復職することは困難で、復職者の大部分は、パート医師として働いている。常勤の勤務医の給料は世間で思われているより格段に安く、医師の大部分がアルバイトをして生計を立てていることは最近ではよく